

今月のみことば 2017年2月

「罪から来る報酬は(永遠の)死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。」(ローマ人への手紙6章23節)

賀茂の競べ馬

吉田兼好の書いた『徒然草』に「賀茂の競べ馬(くらべうま)」という興味深い文章がある(第四十一段)。

ある日、名物の競べ馬を見に行った兼好法師がふと見ると、棟(せんだん)の木に登り、つめかけた群衆をよそに、特等席を得たかのように、木のまたに腰を掛けて見物している法師がいた。ところが、木につかまったまま、すっかり眠りこけてしまい、今にも落ちそうになっては目を覚ますということを繰り返している。あぶなっかしくて見てられないほどである。人々は彼を嘲笑し、「なんと愚かなやつだ。あんなに危険な枝の上で、よくも安心して眠れるものだ」と言っていたが、それを聞いて兼好は次のようにつぶやいた。

「我等が生死の到来、ただ今にもやあらん。それを忘れて、物見て日を暮す、愚かなる事はなほまさりたるものを」(私たちが死ぬことになるのは、今すぐかもしれない。それを忘れて、このように見物して日を過ごしている愚かさは、あの法師以上だ)と。

とても七百年前の文章とは思えないほど、卑近な話である。しかし、兼好法師とても、それではどうしたらよいのか、という答えは示していない。

いつ訪れるかわからない死は永遠の世界への入り口である。いわば、無限に続くロープの先端の僅かな赤い部分が、私たちの何十年かの人生であって、その先には果てしのない永遠が待っている。つかの間の今と、数えることもできない永遠のどちらの方が大事なのか。

私たちは、この永遠の世界があることを忘れ、わずか数センチの部分にしか過ぎない人生をできるだけ楽しく生きようとし、自分がいつか死ぬ存在であることに目を留めない。そして「競べ馬」や、仕事、ロマンス、趣味を生きがいとする。

それ自身は決して悪いことではない。しかし、もっと大切なことは、死が訪れる前に、罪を悔い改め、イエス・キリストを通して永遠のいのちにあずかることである。なぜなら「我等が生死の到来、ただ今にもやあらん」からである。

この永遠の救いに入ることと比べれば、この世で困難、損失、病気、災害に遭ったとしても、それを損失と呼ぶことはできない。むしろ、それらによっていのちのはかなさに気づかされ、神との和解に至るとするなら、それこそが本当の幸いではないだろうか。

